

小説の読解

今回の学習のポイント

- 深く読むために必要なこと
- 人物について
- 視点について
- 心情について

はじめに

小説は、言葉だけで表現する文学です。文字だけで、いろいろな人物やイメージをつくり上げることができます。それでは文字からイメージでできることであれば何でも自由に想像してよいのでしょうか。一人で楽しむ読書であれば、その読み方もよいと思います。しかし、その小説を少しでも深く読み、作品を解釈していくためには、読むための視点があります。

今回は、深く読むための視点や考え方を身につけていきましょう。

深く読むために必要なこと

小説は、人物（だれが）、場面（いつ、どこで）、出来事（何を、どうした）などが文字によって書かれています。それらが、どのように設定され、どのように書かれているのかを、初めに捉える必要があります。

● 人物について

小説には、たくさん的人物が出てきます。番組で扱った宮沢賢治の「やまなし」では、二匹の蟹かにの子どもや一匹の魚が出てきます。小説に出てくる人物の行動や性格はもとより、その人物のものの方や感じ方、考え方まで捉えることが必要になります。話が進行していく中で、それらの人物がどのように考え、行動しているか、どのような心情変化が起きているかをきちんと捉えることが、小説や物語を深く読むための第一歩となります。

その中でも、物語を通して中心となる人物が主人公です。小説を読む際には、「主人公は誰なのか」そして、主人公とかわかって物語を進める「相手役は誰なのか」を常に問いかけながら読む必要があります。

● 視点について

小説の中には、登場人物の心情を語ったり、状況を説明したりする視点人物がいます。語り手と言われたりします。登場人物の心情を全て語ることができる「三人称の語り手」もいれば、夏目漱石の『こころ』下「先生と遺書」に出てくる「私」

国語監修・執筆

鈴木 周太

のように自分の心情だけを述べ、他の登場人物の心情を述べることがない「一人称の語り手」もいます。

その作品が、どのような、そして誰からの視点で描かれているのかを把握することで、作品をより深く読むことができます。

●心情について

現実世界の私たちは、何かしらの感情によって行動します。小説も同じです。登場人物の心情は、視点人物によって直接心情が説明されることもあれば、「表情、発言、行動」などの描写から読み取らなければならない場合もあります。

番組で、金田一先生がおっしゃっている「心理描写」「情景描写」がこれにあたります。番組で確認してみましょう。物語が進行していく中で、登場人物の心情がどのように変化していくかを丁寧に確認する必要があります。風景描写や登場人物の心情変化、登場人物のさりげない行動などを丹念に集めていくことで、ただ何となく読んでいただけでは気が付くことのできないものを発見することができます。小説を読む醍醐味の一つは、ここにあります。

まとめ

小説を読むと、自分以外の人生を追体験することができます。作品を読むことで、さまざまな幸福を味わったり、不幸な出来事に出会ったり、また反対に、小説の中に出てくるような人物になりたいと思ったり、そのように振舞うこともあるでしょう。小説を読むことで、今の自分が抱えている悩みが自分一人の悩みではないことがわかることもあります。

小説は想像力によって人生を豊かにしてってくれるものです。想像力は、使わなければ衰えていくと私は思います。ですから、今回学習したことを踏まえてどんどん小説や物語を読んでいき、より良い、そして豊かな人生へと歩いていってほしいと思っています。